編集文献学に基づく人文科学資料エディティング・システム構築の試み

― 第一段階としてのカフカ・テクスト情報の構造化と実装 ―

明星 聖子　　永崎 研宣
埼玉大学大学院文化科学研究科　　山口県立大学情報化推進室

本稿は、人文科学研究資料のための汎用的なエディティング・システム構築をめぐる研究報告である。まず第一段階として、カフカの文学作品のなかでも編集という点でもっとも複雑な問題を呈している"Der Jäger Gracchus"のテクストに関する情報を、ドイツ編集文献学の理論に基づき構造化し、それをインド仏教学研究用に開発された文献関連情報データベース上へ実装することを試みている。現在この試みは比較的順調に進行しており、その順調さの背景には、文学と宗教学の文献情報処理の方法の共通性が認められる。今回の研究は、システム開発を通してこうした共通性を検討しながら、汎用的システム設計を支える汎用的な文献学理論を模索することも目的としている。

A First Step Toward Developing an Editing System for Humanities Research Based on German Scholarly Editing Theory

― The Structuring and Implementation of Information from Kafka's Text ―

Kiyoko MYOJO*　　Kiyonori NAGASAKI**
*Saitama University
**Yamaguchi Prefectural University

This paper describes the collaborated electronic editing system of Franz Kafka's work that we are now developing. The concept behind this system is based on German scholarly editing theory, especially the methodolgy of historical-critical editing. As the first step of constructing the database, we structured information about Kafka's texts, including historically significant editions and their editorial information (such as pagination and linage). This same information was also cross-referenced. This model was implemented via an existing system originally developed to analyze Buddhist texts.

1. はじめに

私たちは現在、ドイツ編集文献学理論に基づくカフカ・テクストのエディティング・システムの構築を試みている。その第一段階で対象として扱っているのは、カフカ・テクストのなかでも編集という観点でもっとも複雑な問題を呈している作品"Der Jäger Gracchus"に関わるものである。以下、この"Der Jäger Gracchus"をめぐる解説から、カフカ・テクストの特性、そしてその特性に応じたデータベースのありようを明らかにし、さらにそれに基づくシステムの構造と、そのあるべき発展の方向性を議論する。

2. " Der Jäger Gracchus" と編集

"Der Jäger Gracchus"（『狩人グラッフス』）とは作品名であるが、しかしその作品は、正確にはカフカが書いたものではない。それは、カフカの友人マックス・ブロートが、カフカの没後、遺されたノートのなかから、いくつかの断片を「切り出し」つなぎあわせて「仕立てた」ものであり、"Der Jäger Gracchus"という名前は、あくまで、そのブロートによって編集されたテクストに付けられた呼称である[1]。

よく知られているように、ブロートは、生前無名に近かったカフカの、遺された膨大な草稿を編集して世に送り出した功労者である。ところが、のちにカフカの名声が十分高まるや、彼は、カフカの遺稿を独占的に所有し、またそれらを恣意的に改竄して流通させてしまったと人物として、研究者たちから厳しい批判を浴びるようになった。カフカの遺稿の大半は、オック

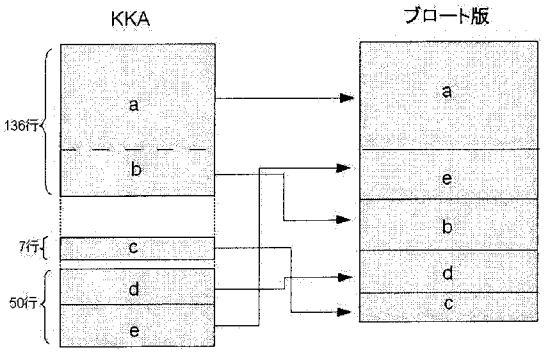


図1

スフォード大学に渡り、ようやく1980年代から、研究者たちによって学術的に編集されたテクストを集めた全集が刊行され始める。この新しいカフカ全集、「批判版カフカ全集」(Kritische Kafka-Ausgabe, 以下、KKA と略)は、「正統なテクスト (authentischer Text) の作成」を編集の第一目標に掲げ、カフカの草稿にできるかぎり忠実に編集した活字テクストを提示している[2)]。

"Der Jäger Grachhus"に戻れば、ブロートが作品としてまとまりをつけたテクストは、このKKAでは、ブロートが切り出して加工する以前のばらばらの断片のかたちで、もちろんタイトルもつけられることなく、ノートに記された他の断片群のなかに「埋め込まれた」ままの状態をみせている。

KKA の特徴的編集方針として挙げておかなければならないのは、「文字搬送体主義」(Schriftträgerprinzip)[3)]である。これは、文字を載せている物理的な単体 (=文字搬送体) を単位に編集するというものであり、この場合カフカが執筆に使ったノートがその単位となる。そして、その単位の内部のテクストは、「個々の帳面上での本来のテクスト相互の関連性を保つように」編集される。わかりやすくいえば、ノートや紙片の上に書かれたさまざまな種類のテクスト断片 (物語の書き出しやメモ、手紙の下書き、日記風の書き込みなど) は、なんら分類されることなく、帳面上ある順序のままで再現されるのである。その結果、"Der Jäger Gracchus"は、KKA では、上記のように新しいテクスト形態を示しているのであり、それと従来のブロート編集のテクスト (以下、ブロート版と略) の形態との関連を描けば、前頁の図1のようになる。

すでに明星は、ブロート版と KKA の二つのテクスト形態をめぐる比較検討から、この Gracchus-Text について新しい解釈を導き出した論文を発表している。そしてそこで、過去の研究が、ブロート版の加工されたテクスト形態によりいかに混乱させられていたかを明らかにし、カフカ研究の典拠には、カフカのエクリチュールをできるかぎり忠実に再現したテクストが必要だと説いている。

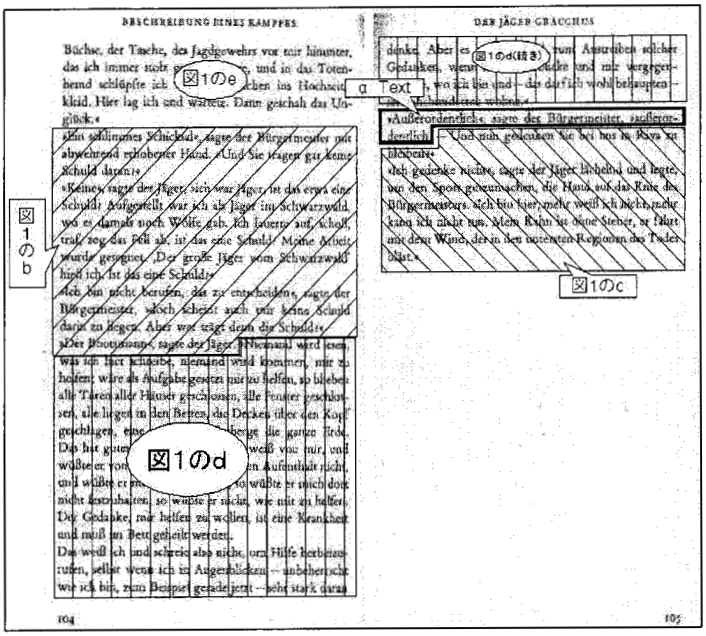


図2

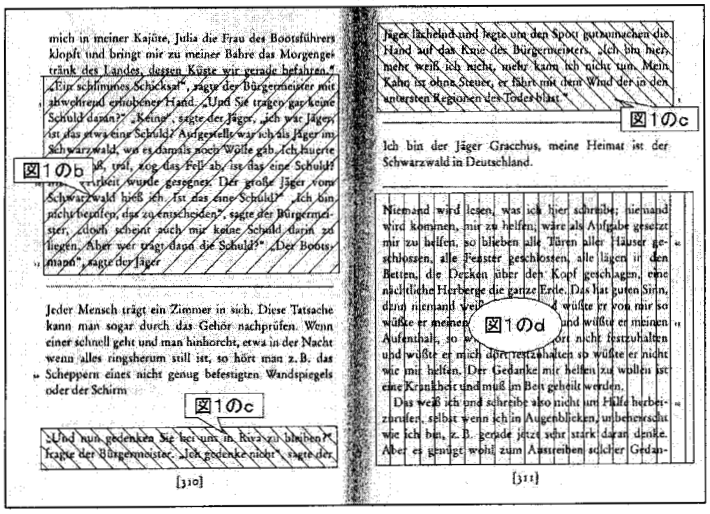
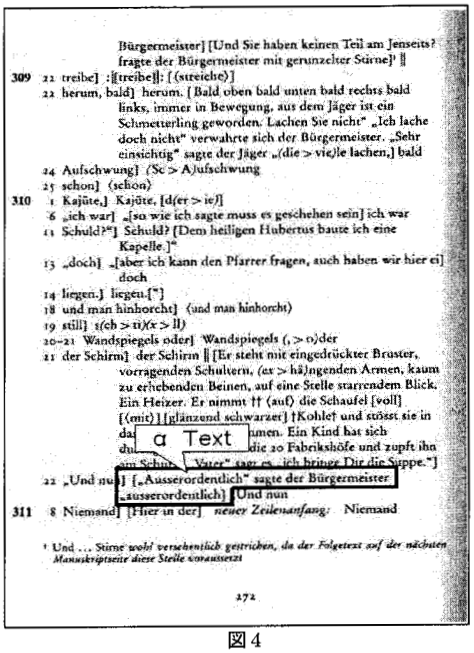


図3

ところで、ここで問題になるのが、KKA の編集の不徹底さである。例えば、それのヴァリアント提示は、「本文」と「異文」を分ける伝統的な分割法でおこなわれているが、その方法は、上で述べた「文字搬送体主義」と明確な矛盾をきたすものである。なぜなら、カフカが削除した箇所は、異文として切り出され、本文とは別の場所に収められてしまうからであり、それにより


Bürgermeister] [Und Sie haben keinen Teil am Jenseits? fragte der Bürgermeister mit gerunzelter Stirne]¹ ‖
309 22 treibe] :[treibe]: [(streiche)]
22 herum, bald] herum. [Bald oben bald unten bald rechts bald links, immer in Bewegung, aus dem Jäger ist ein Schmetterling geworden. Lachen Sie nicht" „Ich lache doch nicht" verwahrte sich der Bürgermeister. „Sehr einsichtig" sagte der Jäger „(die > vie)le lachen,] bald
24 Aufschwung] (Sc > A)ufschwung
25 schon] (schon)
310 1 Kajüte,] Kajüte, [d(er > ie)]
6 „ich war] „[so wie ich sagte muss es geschehen sein] ich war
11 Schuld?"] Schuld? [Dem heiligen Hubertus baute ich eine Kapelle.]"
13 „doch] „[aber ich kann den Pfarrer fragen, auch haben wir hier ei] doch
14 liegen.] liegen.["]
18 und man hinhorcht] (und man hinhorcht)
19 still] s(ch > ti)(r > ll)
20–21 Wandspiegels oder] Wandspiegels (, > o)der
21 der Schirm] der Schirm ‖ [Er steht mit eingedrückter Bruster, vorragenden Schultern, (ex > hä)ngenden Armen, kaum zu erhebenden Beinen, auf eine Stelle starrendem Blick. Ein Heizer. Er nimmt †† (auf) die Schaufel [voll] [(mit)] [glänzend schwarzer]] Kohle† und stösst sie in da[illegible]umen. Ein Kind hat sich du[illegible]die 20 Fabrikshöfe und zupft ihn am Schurz. „Vater" sagt es „ich bringe Dir die Suppe."]
22 „Und nun] [„Ausserordentlich" sagte der Bürgermeister „ausserordentlich] [Und nun
311 8 Niemand] [Hier in der] *neuer Zeilenanfang:* Niemand

α Text

¹ Und … Stirne *wohl versehentlich gestrichen, da der Folgetext auf der nächsten Manuskriptseite diese Stelle voraussetzt*

272

図4

「本来のテクストの相互の関連性」は寸断されてしまうからである。

KKA の編集方針への不満は、90 年代から研究者たちによって表明されており、1995 年からはそれを受けるかたちで、さらに新しいカフカ全集の刊行が始まっている。この最新のカフカ全集(Franz Kafka-Ausgabe、以下 FKA と略)は、カフカの草稿への徹底した忠実を謳って、それらをすべて写真とその翻刻で再現することを目指しており、しかも忠実さを損ねることを嫌って活字のきれいな「確定されたテクスト」(definierter Text)を提示していないかなり特殊な全集である。

以上挙げた 3 つのカフカ・テクストの形態の差異を具体的に伝えるために、それらの版面の写真を掲げる。前頁の図 2 が、ブロート版の"Der Jäger Gracchus"からの見開き頁、図 3 が、その網掛け部分に相当するテクストが掲載されている KKA の本文からの見開き頁、また図 4 はその異文の 1 頁、また図 5 が、同じくブロート版の網掛け部分のテクストの一部が書かれた手稿の FKA の写真の 1 頁、図 6 がその翻刻の 1 頁である。

さて、ここで明らかにしたいのは、現在のカフカ研究におけるあるプラクティカルな問題点である。KKA の出版が始まったのは、上述のように 1980 年代であり、その巻がほぼ出揃ったのは、1990 年代の終わりである。つまり、このことは、ここ 10 年ほどのもの以外の研究は、すべてブロート版に基づいておこなわれていたということであり、それらの論文内でのカフカ・テクストの引用および参照の際に示されるロケーション情報は、すべてブロート版に拠っていることを意味する。

もう少し具体的にいえば、例えば、数十年前の論文で、図 2 の枠で囲まれた部分のテクスト(以下、α Text と略)が言及されていたとする。そのとき示されるロケーション情報は、B107 である。この B は、ブロート版全集の"Beschreibung eines Kampfes"(『ある戦いの記録』)という巻名の略号の B であり、その 107 頁をみよ、ということである。ところがその B107 に掲げられているテクストは、ブロートによって加工されたものであり、α Text のカフカの手稿における位置はそこではない。そこで、現在、研究者がその α Text を問題にしようとすれば、それが「正しく」はどこにあるかを探るため、KKA にあたらなければならない。

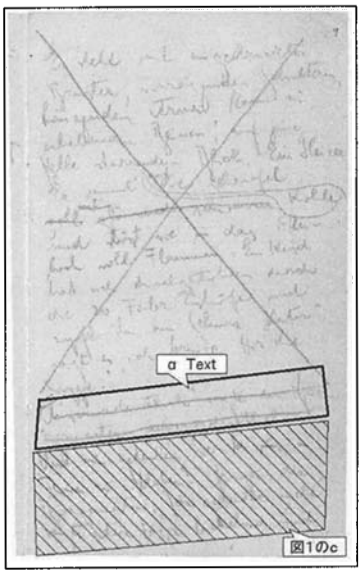


図5

ところが、これがかなり専門的な手続きを要する。まず、KKA では"Der Jäger Gracchus" のテクストは、ブロートの加工前の断片のかたちであるため、その作品名は本文中のどこにも登場しない。そのため、まず研究者は、それが、いったいどのノートに書かれていたものかを、過去の研究論文にあたり調べ、それがブロートによって Der erste Oktavheft と名付けられて

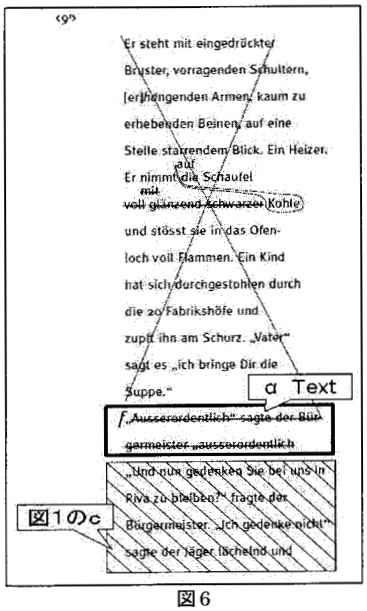


図6

いたノートに書かれていたことを知る。そして、それがわかるとそのOktavheft（8つ切りノート）がKKAではどの名称で呼ばれているかを調べ(KKAではそれはOktavheft B)、それから今度はそのノートがKKAのどの巻に収められているかを突き止める。こうしてようやく、KKAの本文のそのノートの箇所をあたることができるのだが、しかし、実際にはそこにαTextは見つからない（図3参照)。なぜなら、それは削除された文章＝「異文」であるから、KKAのTextband(本文篇）ではなく、別冊の資料を集めたApparatband（資料篇）のほうに収められているからである(図4参照)。

そして、2007年現在、じつは彼の探索はこれでは終わらない。昨年2006年にFKAの"Oxforder Oktavhefte 1&2"の巻が刊行されたからであり、そのOxforder Oktavheft 2（これがFKAでの当該ノートの新たな名称である）の冊子の頁をめくって、αTextのありかを探す必要がある。こうしてようやく彼は、現時点で流通している、カフカの手稿にもっとも忠実なかたちのテクスト（図5参照）に、ようやく行き着くことができるのである[4]。

3. 編集文献学とシステム構想

そもそも、このような作業が必要なこと自体、KKAの大きな欠点を示すものである。KKAのなかには、カフカ受容において歴史的にもっとも重要な役割を果たしたブロート版テクストに対する言及は一言もない。学術的なテクスト批判（Textkritik)を経た全集であるのだとすれば、本来、このブロート版との校異こそ提示すべきなのだが、それももちろんない。

あらためて説明しておけば、上で本文と異文が分割されているといった異文とは、文献学用語でいう生成ヴァリアント(Entstehungsvariante)である。具体的には、カフカの草稿内の削除訂正の跡のことであり、例えば、上のαTextがそれにあたる。いま、KKAに収録されるべきといった異文とは、それとは種類が異なる。それは、伝承ヴァリアント（Überlieferungs-variante）と呼ばれるものであり、ある作品が社会のなかを流通していくにあたり、過去にその作品のインターフェースとして存在したテクスト形態相互の異文である。

この伝承ヴァリアントの研究上の重要性については、いうまでもないだろう。おそらく、古典文学研究は、このヴァリアントを認識する作業を怠っては始まらない。なぜなら、本来であれば典拠とすべきオリジナルはとうの昔に失われており、何らかの「信頼のおける」典拠を獲得するのであれば、それらを「写した」写本相互の関連から、そのオリジナルのアーキタイプへ遡及していくほかに方法がないからである。

いっぽう近代のテクストについては、この伝承ヴァリアントの重要性は軽視されがちである。その理由のひとつは、作者の手書き原稿という唯一無二のアウラを放つものの存在であり、それがあるがゆえ、この手稿こそが信頼のおける典拠だという主張があまりにも妥当に響き、伝承形態の価値の吟味にまでなかなか思考が及ばないからである。

だが、手稿がはたして「作品」のオリジナルかというのは、じつは難しい問題である。例えばカフカの場合でいうと、少数ではあるが、カフカ自身が、出版を決意し、世に送り出した作品というのもある。その、彼が活字化の過程に参加した活字テクストと、カフカがその「下書き」として書いた手書きの原稿のいったいどちらが、その作品のオリジナルなのかという問題は、一筋縄では解けない。

上で、カフカ研究者の基礎的作業として、草稿の写真まで行き着く道筋を示したが、しかし、それは、あくまで"Der Jäger Gracchus"のような、作者の生前未発表の未完結なテクストの場合である。カフカが自ら公にした"Die Verwandlung"（『変身』）については、そうした作業は必要かといえば、必ずしもそうではないだろう。また、"Der Jäger Gracchus"と同じ種類の、"Das Schloß"（『城』）等を扱う場合にしても、はたしてそれが必要かどうかは議論の余地がある点である（そもそも、FKAの"Das Schloß"の巻はまだ刊行されていないのであるが―)。

少なくとも明星はそれが必要と思って、FKAの写真版にあたっているが、実際のところ、それをおこなっている研究者は少数派の部類だろう。これは誤解を避けたい点なのだが、明星は、別に、学者であれば必ずあの作業をしなければならないと主張しているわけではない。いわゆる文学研究の探求のレベルにもさまざまあって、例えばKKAだけを典拠とした成果を学術的成果として成り立たせることも十分可能である。また、過去の「信頼のおけない」ブロート版テクストを典拠にした研究にも、現在なお参照しなければならない重要なものは数多くある。

ここで確認すべきは、研究典拠としての資料の価値は、一義的には決められないという点である。作者の意図をいかに反映しているかという点でみれば、ブロート版の評価はたしかに低い。しかし、そのテクストがなければ現在のカフカ研究そのものがありえなかったわけであり、すでに繰り返しているように、それのカフカ受容という点で果たした意義は大きい。とすれば、平たくいえば、研究の底本としての「正しい」テクストとは、複数あるということになるのであり、つ

まりは、この資料をめぐる正当性の認識こそが、私たちのシステム開発の出発点なのである。

今回、私たちが開発しようとしているカフカ・テクストのエディティング・システムは、過去または現在において流通している研究典拠資料を、デジタルアーカイブとして保存することを目的のひとつとしている。

この保存という点の重要性をあらためて強調すれば、現在ブロート版は、個人では入手困難な状況にある。そもそも出版年が1950年代のブロート版全集は、とうに絶版され、ドイツの古書店を訪ねたとしても、今ではその発見はきわめて難しい状況である[5]。

また、むろんそれ以上にデジタル化が急務なのは、カフカの手稿そのものについてである。図5の写真をみればわかるように、それらの多くは鉛筆書きであり、紙をめくるごとに粉が飛んで消滅へと向かってしまう非常にフラジャイルなものである。誠実な研究者が信頼のおける典拠に基づこうとするとき、論理的には究極としてその現物へと行き着かざるをえないのだが、にもかかわらず、その唯一無二の存在物はそう簡単に人目に触れさせるべきではない。

念のため確認しておくが、上述の基礎作業の説明の際、FKAの写真を参照することを、あたかもその作業の終点であるかのように述べたが、しかし、真の終点はそこではない。本当の終点は、いまもいったように、オックスフォード大学のボードリアン図書館の書庫に収められている手稿そのものである。だが、それは現実的にはたどり着けないものであるからこそ、ヴァーチャルな世界での仮の終点が必要なのである。

私たちのシステムの目指すところは、それだけではない。むしろ、その目的の重点は、上述のようなカフカ研究における基礎作業のトレールをすべて記述することにある。すなわち、KKAやブロート版といった資料相互のロケーション情報の関連を探り、その関連情報を記述し、それを可視化すること。また、ロケーション情報のみならず、テクスト自体の相互のさまざまなレベルの差異も認識し、それを表示し、そして、こうしたあらゆる情報を共有すること。

これは、別の言葉でいえば、20世紀のドイツ編集文献学（Editionsphilologie）が文学研究の典拠の理想として掲げてきた「歴史的批判版全集」(historisch - kritische Ausgabe)のデジタルメディア上での実現である。歴史的批判版の最低要件のひとつとして、歴史的に意義のあるすべての証言資料（Zeuge）間のヴァリアントを網羅的に記述することというのがあるが、その要請の背景には上述の文学研究資料の複数性をめぐる了解がある。すなわちある作品の解釈のためには、その作品の伝承を担ってきた複数のテクスト形態の比較検討が必要だという学問的コンセンサスである。

だが、その必要性をいうのであれば、本来要請すべきは、差異の記述ではなく、テクストそれ自体の網羅的収録であろう。ところが、それが求められなかった理由のひとつは、明らかにメディアの制約が考えられる。従来の紙メディアでは、容量という点で、過去の全集をすべて収めた全集というのは実現不可能だったからである。

この意味で、デジタルメディアが、すでに理想の実現に寄与しているのはいうまでもない。新しいメディアは、技術的にもはや無限といっていいほどの容量を提供しており、ひるがえれば、だからこそアーカイブのメディアとしても適している[6]。

ただ、ここで注意しなければならないのは、たとえデジタルメディアが複数の全集の収録を可能にしたとしても、やはり、ヴァリアントの記述は「批判的」な編集には不可欠だという点である。なぜなら、差異を認識することそれ自体、知的作業であり、その作業の結果の「知識」の蓄積と共有こそが、文献学的議論の第一歩であるからである。

さてここで、実在物の保存というレベルを超えて、さらに解釈や認識といったものまでの蓄積を考えるとき、その行為の主体に関する問題が立ち上がる。むろん、保存も解釈行為のひとつであり、そうであるがゆえ主観の影響は避けられないのであるが、しかし、その主観の影響力という点でいえば、解釈それ自体の記述に関わるもののほうが深刻である。

これを考えるとき確認すべきは、こうした認識行為の主体はこれまで誰が担っていたかである。過去、編集文献学がいうところの「批判的」編集に携わってきたのは、明らかに、その対象テクストの研究に関しすでに評価の高い実績を積んだ研究者たちである。カフカの場合においても、KKAの編集プロジェクトには、著名な研究者たちが多く名を連ねて、チームを組んでそれに携わっているのであり、すなわち、その主体には高度な専門性が備わっていることが重要である。

さらに、いまのプロジェクトやチームという言葉に関連して、別のレベルの重要さも指摘しておかなければならない。それは、数という点である。全集編集とは、必ずやプロジェクトとして、複数の者たちがチームでおこなうべき作業である。実際、チームで携わっているはずのKKAの編集作業にしても、1974年のそのプロジェクト発足から30数年たった今でも、まだ完結にいたっていない。

これ以上、こうした主体をめぐる問題について踏み込む紙数はないが、しかし、忘れずここで述べておきたいのは、私たちの開発しようとしているシステムの

特徴のひとつが、まさにこの問題に関わっているのだという点である。それは、できるかぎり多くの主体の参加できる場、すなわちインターネットを活用した、研究者たちの共同作業の場としてのコラボレーション・システムとなることも目指している。つまりは、上述の研究者めいめいの作業のトレールを統合させて、データベース構築のスピードアップを図ると同時に、専門の研究者としての多くの主体の知識の共有、蓄積から、さらにそれをめぐる議論という研究活動プロセスの動的データの集積も念頭に置いているのである。

またこれに関していえば、参加する研究者たちが、既存のテクスト形態同士のヴァリアントを記述するのみならず、新たに草稿の写真から、それらのテクスト形態の「間違い」を発見、訂正し、その結果を記録、さらにはそれを共有するといった、利用者が編集者となって編集したテクスト自体も公表しうるエディティング・スペースを設けることも、検討している。

4. カフカ・テクスト情報の構造化と実装

今回その開発の第一段階としておこなったのは、このエディティング・システムに搭載させる各種の情報の構造化である。まずはその基礎となる部分を明確化させるため、その情報を既存の研究典拠資料のデータおよびそのロケーション情報、そしてその関連情報に絞り込んで思考した。それを図示したのが図7である。

ごらんのように、第1層には、上述の、本来研究者が行き着くべき現物の手稿のデジタル画像が置かれる。そして、第2層には、その手稿の解釈の結果としての活字テクストの画像、すなわちブロート版、KKA、FKA（翻刻）の版面のデジタル画像がくる[7]。第3層は、それぞれから作成したテキストデータである。第4層は、第3層までのすべての典拠資料それぞれのロケーション情報である。このロケーション情報として、まず重要なのは、既存の紙メディア上における頁数、行数だろう。また、巻名、作品名、さらにはノートや紙の名前といったレベルのものも、ここに含まれる。また、こうした紙メディア上でのロケーション情報では、より詳細な関連付けは困難であるため、コンピュータ上のロケーション情報を用意しておき、紙メディア上でのロケーション情報とマッピングさせる。これによって、コンピュータ上のロケーション情報を指定することによって紙メディア上のロケーション情報へと関連づけ、最終的に現物のデジタル画像へと行き着けるようになる。第5層として蓄積されることになるテクスト相互の関連づけ情報は、このコンピュータ上のロケーション情報を用いて記述される。第5層では、コンピュータ上のロケーション情報を用いたテクスト相互の関連と同時に、その関連についての意味情報が記述される。この意味情報とは、ヴァリアントや編集といったテクスト間の関係を指しており、カフカ・テクストの研究を通じて明らかとなる関係の性質を分析・反映させていくことになる。したがって、ヴァリアントの認識等の情報が蓄積されるのは、このレベルである。そして、第6層は第5層において蓄積された関連づけ情報を利用し、カフカ研究の文脈において有益な形でそれぞれのテクストをプレゼンテーションすることになる。これは、各版の同じテクスト部分を同時に表示させるという研究ツール的なプレゼンテーションだけでなく、テクスト間の意味情報を利用してさまざまな関係を分析したり、さらにその結果を視覚化させたりすることも含まれている。

現在、私たちは、この階層図に基づいた実装もすでに試みている。この実装を実現させているのは、永崎がインド仏教文献研究のために開発しているインド仏教文献関連情報データベース上である[8]。今回それを試験的に採用した主な理由としては、このデータベースの構造が、いまのカフカ・テクストをめぐる階層と似たものである点（図8参照）、そしてその第I層の資料層には仏教文献の資料の性質の多様さからフレキシビリティがあり、図7の階層を柔軟に収束できる可能性を有している点、さらにはその資料の特性からすでに多言語対応となっている点が挙げられる。

図8の構造をあらためて説明すれば、以下のようになる。永崎のこのシステムでは、プレーンテキストの

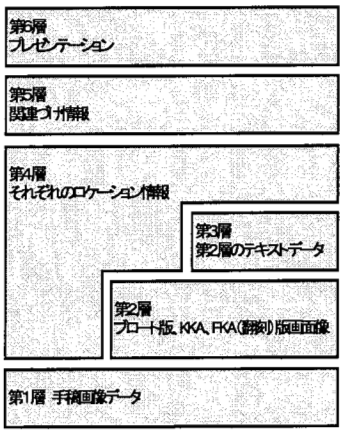


図7

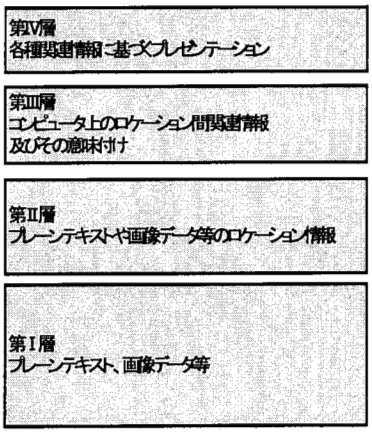


図8

テキストデータや画像ファイル等（他のメディアによるバイナリファイルも含む）は基本となるデータとして第Ⅰ層に保存される。そして、それらのデータのそれぞれに関して、紙メディア、音声データや動画データ等のメディア上のロケーション情報とともに、それらにマッピングされる形で、コンピュータ上でファイルを操作するための詳細なロケーション情報がそれぞれに割り当てられる（第Ⅱ層）。例えば、テキストデータであれば、シラブル単位、あるいは文字単位で割り当てられることになる。そして、これらのロケーション情報をもとにして、テクスト間を関連づけたロケーション間関連情報が記録されるのが第Ⅲ層である。そして、ここでは、テクスト間の関連情報がどういう性質（引用か、ヴァリアントか、参照か、翻訳か、等々）を持っているのかという情報も記述され、最後に、それらの情報に基づいて必要に応じた表示を行うのが第Ⅴ層である。この層では、第Ⅳ層の情報に基づいてテクスト間の関連をさまざまな形でヴィジュアライズし、あるいは分析したりするだけでなく、必要に応じてXML（あるいはTEI）等でマークアップされたテクストを出力することも想定している[9]。

永崎のシステムが明星の構想とさらに合致するのは、このシステムがすでにコラボレーション・システムとしての要素を備えている点である。このシステムは、Web上で動作することを前提として構築されているため[10]、インターネットを通じてユーザがさまざまな層に対する追記を行うことが可能となっている。さらに、ユーザによって追記されたデータは第Ⅰ層として保存されることになっており、それによって、追記に対してさらに追記するという形の再帰的なコラボレーションを可能としている。

現段階でのカフカ・テクストの実装についていえば、第Ⅲ層までのロケーション間関連情報のところまでの構築にはおおかた成功している。しかし、第Ⅲ層のロケーション間関連情報の意味づけという第Ⅳ層のレベルでは、扱う資料の性質の大きな相違から、すでに用意されていた属性では不十分であり、この属性をどう定義するかが大きな課題となっている。また、プレゼンテーションに関しても、著者の草稿が存在するという点をはじめとして、表現の対象となるテクスト間の関連のあり方がまったく異なっているため、当然まったく違った仕組みを用意する必要が生じている。この問題の解決には、例えば、図1で示したようなあの入り組んだテクスト関連構造を、どう提示していくかといったあたりから取り組んでいく予定である。

5. おわりに

今回、仏教文献研究用のシステムに、ドイツ語の文学テクストを載せるという一見奇抜な試みが比較的スムーズに進行しているのは、仏教学における文献情報処理の方法と、文学におけるそれとの間に、密接な類縁関係があることに起因する。永崎が依拠している仏教学におけるテクスト批判の方法は、基本的にはドイツ文献学の伝統的手法を援用したものであり、その理論の大本は、19世紀前半にカール・ラハマンが聖書写本を扱うために体系化したものに由来する。ラハマン理論は、具体的には写本相互の系統をテクスト細部の関連から分析して、最古の写本に遡及し、それを復元することを目的とするが、ただし、上述のように、現在のドイツ文献学は、資料の歴史性を考慮し、その複数性を視野に入れた柔軟な方法論を展開しており、永崎のシステムも、その先端的理論の影響下にある。

いずれにせよ、あらためていえば、仏教学はもちろんキリスト教学においても研究は、文献テクストに基づき展開されていく。学術的探求の元となるそのテクストは、科学的原理によって復元されたものであるべきであり、いいかえればテクスト編集をめぐる方法論そのものをめぐる議論も、宗教学研究においては、重要なファクターとなっている。その意味で、宗教学と編集文献学は、そもそもきわめて密接な関連があるものといえるのである。

じつは、私たちの研究の真の主眼は、ここにある。人文科学研究が研究上の典拠とするのは、すべからく文献である。文献とは何かを端的にいえば、それは文字で書かれたものである。むろん、人文科学研究の分野には、文字資料だけではなくモノ資料を扱うものもある。しかし、それが研究として成り立つためには、そのモノについての文字による記述が必ずどこかの段階で必要である。その記述された文献があってこそ、知の蓄積と交流が可能になる。

宗教学にせよ、文学にせよ、歴史学にせよ、人文科学と呼ばれる領域に属する研究とは、文献上のテクストを読み、それを解釈して意味づけし、その情報を構造化して共有可能なものにし、相互に関連付けていくプロセスだと集約的にいうことができるだろう。とすれば、そのおのおのの情報処理の方法からは、さまざまな次元で共通する層を取り出すことができるはずであり、その各層の抽出によって、おそらくは人文科学研究資料のための汎用的なデータベースの基本設計が導き出せるはずである。

あらためてことわっておくが、私たちが開発しようとしているシステムは、現実に完成させ、公開し、運用していくとなると、多様なレベルで多大な困難が予

想される。著作権や所有権といった法的な問題に加え、永崎自身すでに指摘しているように、インターネット上での動的データの共有には、リアルタイム性・双方向性という特徴の負の側面として、信頼性の問題やヴァージョンの問題など、技術的な手法だけでは解決の容易でない難問が次々と控えている[11]。

しかし、だからこそ、理論に基づいたモデルの構築が不可欠なのである[12]。法や技術や社会性の問題というのは、生きている現実の時間の中から見れば、一見強固な枠組みに見えるが、しかし、その時間を超えた視点から眺めると、それらはある意味移ろいゆくものである。現実において何かを「作る」現場に、普遍への志向という視点を取り戻すためにも、真理探究という人文科学研究の営みに、徹底的に寄り添ったモデル化が今こそ追求されるべきなのである。

謝辞

本研究に関しては、内木哲也氏（埼玉大学大学院文化科学研究科）より、貴重なご教示をいただいた。ここに記して感謝の意を表する。また、本研究の一部は、平成 18-21 年度科学研究費補助金基盤研究（C）「デジタルアーカイブとしての文学全集の可能性—編集文献学に基く新時代の文献学の模索」（研究代表者：明星聖子）の補助を受けた。

注及び参考文献

1) 本稿で論じるカフカ・テクストにおける編集の問題については、詳しくは以下の文献を参照。明星聖子『新しいカフカ—「編集」が変えるテクスト』(慶應義塾大学出版会) 2002.

2) 本稿で、ブロート版、KKA と表記する各全集の Gracchus-text 掲載各巻の書誌情報については、注 1 の文献を参照されたい。なお、2006 年に刊行された FKA のものだけは以下に挙げる。Kafka, Franz: Oxforder Oktavhefte I& II .Hrsg. von Roland Reuß und Peter Staengle. Basel/Frankfurt a.M. 2006 (Historisch-kritische Ausgabe sämtlicher Handschriften, Drucke und Typoskripte).

3) この用語は、注 1 の文献では「帳面丸写し主義」と訳されている。本稿ではその他の箇所でも、注 1 の文献とは異なる訳語をいくつか用いている。こうした揺れは、汎用的なシステム開発を目指して、理論的な概念を他分野の編集理論も参考にしながら再検討し、より適切な日本語訳を模索していることによって生じている。なお、ここでの「搬送体」という語は、以下の文献で示されている理論からの援用である。石上英一『日本古代史料学』（東京大学出版会）1997.

4) 現在、この作業の煩雑さは、FKA、KKA、ブロート版の関連（作品名、ノート名レベル）が検索できる電子コンコーダンスを活用することで、実際かなり緩和されている。2006 年に、FKA の編集者であるローランド・ロイスが主宰する研究所（Institut für Textkritik）の Web サイト（http://www.textkritik.de/findbuch/）で公開されたこのコンコーダンスは、ただし、あくまで FKA で刊行済みの少数のテクストに関するものしか作成されていない（完結すれば数十巻に及ぶ予定の FKA の刊行は、1995 年の発刊から 12 年たった現在まだ 5 巻にとどまっている）。のこりの大半のテクストについては、依然本文中のような手続きが必要である。

5) したがって、本文中の上述の基礎作業の前提には、ブロート版や KKA の所在情報を探し、その書籍を求めてそこに赴くという別の作業のレベルがある。私たちのシステムは、将来的には、こうした作業負担の軽減も視野に入れ、それらの書籍の図書館レベルの所在情報、さらには手稿現物の文書館レベルの所在情報まで織り込むことを検討中である。

6) デジタルアーカイブとしての文学全集の有効性については、以下の文献ですでに論じている。明星聖子「デジタルアーカイブのための新しい＜文献学＞—未来の＜文学全集＞、そしてその先にあるものを考えて—」『情報処理学会研究報告』2006-CH-70, pp.25-32.

7) 開発中のシステムの試用版では、第 1 層に、FKA の手稿写真のデジタル画像を置いている。本来そこにはオックスフォード大にある手稿を、（このエディティング・システムでの活用を前提として）可能なかぎり忠実に再現したデジタル画像があるのが理想である。将来、もしその画像が入手できれば、FKA の画像はそれと入れ替えて、歴史的意味のある流通版のひとつとして第2層に置かれることになる。

8) このシステムの詳細については以下の文献を参照。永崎研宣「シラブルを最小単位とする仏教哲学文献データベースについて」『情報処理学会研究報告』2006-CH-71, pp. 33-40.

9) ただし、これについては、データを XML 的な階層構造へと落とし込む必要があるため、すべてのメタ情報をマークアップとして記述できるかどうかについては慎重な検討が必要である。

10) ここでは Web サーバに Apache、データベースサーバに PostgreSQL、インターフェイスの記述には PHP を採用している。

11) 詳細は以下の文献を参照。永崎研宣「インターネットリソースとしての仏教文献」『東洋学へのコンピュータ利用第 18 回セミナー』（京都大学 21 世紀 COE「東アジア世界の人文情報学研究教育拠点」）, 2007, pp.125-134.

12) 文学テクストのデジタル化における理論的検討の重要性については、以下の文献でも論じている。明星聖子、内木哲也「文学デジタルアーカイビングをめぐる理論的考察—作品とは何か、作者とは何か—」『人文科学とコンピュータシンポジウム論文集』(情報処理学会・人文科学とコンピュータ研究会), 2006, pp.153-160.